

大連振興の軌跡

大連振興の 軌跡

夏徳仁

慈道裕治 監修
斎藤敏康・松野周治・曹瑞林 訳

中央公論新社

夏 徳 仁

1955年6月中国・遼寧省大連市に生まれる。1982年東北財経大学（大連）財政金融学部を卒業、同大学財政金融学研究科修士課程、博士課程を修了し、1990年博士（経済学）を授与される。1992年東北財経大学教授に就任、94年から97年まで同大学学長を務める。1998年大連市副市长、遼寧省人民政府副省長に就任。2003年より2009年までの7年間大連市市長を務め、2009年5月より現職の中国共産党遼寧省委員会常務委員、共産党大連市委員会書記となり、現在に至る。主な研究業績は、中国経済の転換期における金融理論と実証的研究に関するものであり、主な著書としては、『金融綜論』（1998年2月、東北財経大学出版社）、『貨幣銀行学』（共著、2007年3月、中国金融出版社）がある。

だいれんしんこう きせき 大連振興の軌跡

2011年6月10日 初版発行

著 者 夏 徳 仁

発行者 小 林 敬 和

発行所 中央公論新社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売 03-3563-1431 編集 03-3563-3664

URL <http://www.chuko.co.jp/>

D T P 今井明子

印 刷 三晃印刷

製 本 小泉製本

©2011 Xia Deren

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.

Printed in Japan ISBN978-4-12-004223-2 C0033

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

巻頭言

大連は日本と所縁の深い都市であり、多くの観光客が毎年大連を訪れ、3000社を越える日本企業が大連に進出している。近年の大連の躍進は目覚ましく、その躍進ぶりは国際的にも注目を集めている。世界経済フォーラムは、夏季ダボス会議の第一回を二〇〇七年に大連で開催し、二〇〇九年の大連開催に続いて、二〇一一年には三度大連で開催する。大連の振興が国際的に注目されていることの証であろう。

大連は中国東北部の最南端に位置し、中国東北三省の玄関口として重要な港湾を有し、貿易、商工業、観光業が発達するとともに、その景観の美しさは、「北の真珠」と称されることがある。本書は、夏徳仁共産党大連市委員会書記が大連市長であった二〇〇三年から二〇〇九年までの大連市改革の活動の記録である。中国に関する書物は多いが、大連という一地域についてはあるが、これほどまとまった改革の記録は貴重である。著者は、東北財経大学の学長であった一九九〇年代から大連市長時代を経て、現在の「大連市書記」に至るまで、幾度となく日本を訪問し、日本との学術交流、政財界をはじめ各界との交流、北九州市、舞鶴市などとの地域間交流において多くの実績を持つ知日家である。多くの大学関係者、政財界関係者が夏徳仁書記との多面的な交流をもっている。

本書は、著者が市長時代に行った政務報告、シンポジウム、国際的なフォーラムでの講演をもとに編纂されており、時には大連発展の戦略を語る党の指導者として、時には行政改革に取り組む行政的指導者として、そして時には経済学者として、改革を指導する著者の姿を見ることができ。特に、著者は、大連への夏季ダボス会議の誘致に見られるように対外開放に大胆な政策をとっており、大連が遼東半島の最先端にあつて中国東北地域の対外的な窓口に位置することとあいまつて、運輸・物流センター建設、金融センター開設やソフトウェアパーク建設を推進するなど、その戦略的思考には注目すべきものがある。

本書に示された大連発展の軌跡は政策論としても関心を呼ぶ。外資導入・対外開放を先行させた中国の経済成長政策は明らかに日本のそれとは異なっている。本書でも示されているように、それと並行して、技術導入・消化・吸収・再イノベーション政策、いわゆる「自主创新」政策が進められている。日本の場合、七〇年代、公害・環境・資源問題への取り組みが技術開発を促進した。中国の場合、大連も同様であるが、外資導入と自主创新との関連がどのように展開しているのか、大いに関心を呼ぶテーマである。また、著者が序言でも述べているように、産業構造の転換、国有企業の改革、そのための政府による政策的主導と市場経済化のための行政改革・規制緩和との関連等々、比較政策論としても関心を呼ぶ。日本と中国では政治経済制度の相違や高度成長期の国際環境の相違などがあり、おのずと相違点が多くなるのは当然として、社会経済発展に共通する政策課題やそれが社会経済的にかなる軌跡を描くのか、改革に矛盾はつきものである、それをいかに解決するのか等、政策論はもとより学術的な面でも多くの興味あるテーマを見出すことができる。本書が、大連の発展への理解に資するとともに、学術面でも役立つことを期

待している。

立命館と著者である夏徳仁書記との交流は古くて長い。一九九六年に、東北財経大学学長として立命館大学を訪問されて以来の交流である。二〇〇四年には、当時の夏徳仁市長のもとで、大連市との間で学術交流協定が締結され、大連市発展研究センターとの間でシンポジウムの開催など活発な研究交流が進められている。立命館大学はこうした経過を踏まえて、夏徳仁書記（当時は市長）に二〇〇八年名誉博士号を授与した。二〇一〇年には私を団長とする訪問団が大連市を訪れ、大連市の教育局をはじめ、専門人材育成に当たる各局との交流を深めることができた。今後、教育界との交流、専門人材育成に関する共同事業などを通して大連市と日本との友好交流に貢献できることを期待している。大連市との交流において夏徳仁書記の支援と協力にお礼を申し上げる。

本書の出版編集は、私を責任者とする「『大連振興の軌跡』刊行委員会」のもとで行われた。刊行委員会の委員である慈道裕治教授、松野周治教授、斎藤敏康教授、曹瑞林教授は大連市と本学との学術交流活動に長年携わっており、今回監修・翻訳を担うこととなった。

また本書の刊行には、日本電産株式会社永守重信代表取締役社長から支援をいただいたことをここに記し、謝意の表明とする。

二〇一一年五月

立命館総長

川口清史

序言

本書は、私が大連市政府の市長を務めた約6年半の間に行った政府活動報告、講演、スピーチを集めたものである。これらの内容は当時大連市政府が進めてきた主要な事業であると同時に、大連市が従来型工業基地を振興させる過程において歩んできた歴史的軌跡でもある。

私は二〇〇三年一月より大連市長に就任して以来二〇〇九年五月に中国共産党大連市委員会書記を拝命するまで、市長として合計約6年半の歳月を過ごした。今振り返ってみると、この6年半という年月は、光陰矢の如しというように、あっという間に過ぎ去り、非常に短かったように思われる。ただ大連市長に就任してさまざまな公務に追われたため、実施した事業を総括する余裕を見出しがたかった。職場が共産党大連市委員会に移動したあと、仕事の交替の際に今まで自ら関わってきた報告や講演、スピーチの原稿を整理した。最初、一般に「文山（山積みの文章）」といわれる手元の原稿に対して特別な思いは持っていなかった。しかし、その中の一部の原稿を真剣に読んでみて、その内容に心を引きつけられるようになった。「事実に基づいて真実を求め（実事求是）」という観点から見ると、これらの報告や講演がよくできているというわけではない。それは政府の公文書という固定的形式に制限されて、紋切り型文書の痕跡がかなり残って

おり、読んでみて多少無味乾燥な感もなしとはしない。しかし正直に言つて私はこれらの原稿に心を引きつけられたことも確かなことである。思うにこれらの文章の魅力は、それが個人的な懐憶と関心をそそる歴史的記録であることによるのである。

私が大連市長に就任してからの第一期任期5年間及び第二期任期の1年半の間、市政府事業の重点は従来型工業基地を全面的に振興させることであつた。この間の政府報告やさまざまな会議でのスピーチ、講演はこの時期の事業内容を反映している。中央政府は二〇〇三年に東北地域における従来型工業基地振興の戦略を打ち出した。これは改革開放政策の実施以来、東北地域の経済発展の節目となる意義を持つ重要な出来事である。仮に改革開放以降の一定の期間、東北地域における計画経済システムの束縛と産業構造調整停滞の影響によつて、「東北現象」が暗い影のように人々の心を覆つていたとすれば、中央政府の打ち出した東北地域の従来型工業基地の振興戦略によつて、東北地域の各省、自治区の幹部、民衆はまるで春風が人々の頬を打つように、極めて大きな積極性と創造性を喚起され、全身全霊を傾けて従来型工業基地振興というこの偉大な事業に加わつたのである。大連は東北地域において経済規模、工業生産額のもつとも大きな都市であり、経済振興は大連にとつて骨の折れる重い仕事である。遼寧省の正確な指導の下で、大連市政府は全市の市民をリードし、6年余の刻苦奮闘を経て従来型工業基地の振興において一定の画期的な突破と前進を遂げた。本書に収める文章は、この間、大連市の幹部、市民が振興戦略を実施する過程で払つた最大の努力と、収め得た豊穡な成果をさまざまな角度から透視している。本書の文献を通してこの数年間の政府事業を回顧する時に、「天の摂理として努力は報われる（天道酬勤）」ともいふべき喜びと安堵の思いの起ることを禁じ得ない。

本書中の数値は、近年における大連地域経済の飛躍的な変化を示しているものである。これらの数値は一見すると部分的、分散的ではあるが、しかしその前後を比較してみれば、いくらかの相互関係を見出すことができる。大連市の経済規模を示すGDPは二〇〇二年の1334億元から二〇〇八年の3858億元へと、約3倍に拡大し、年平均成長率は16%である。大連市地方財政の一般会計収入は二〇〇二年の98・8億元から二〇〇八年の339・1億元へ、約3・4倍に増加し、年平均増加率は22・8%である。固定資産投資額は二〇〇二年の367億元から二〇〇八年の2513・4億元へと6・8倍に増加し、年平均増加率は37・7%である。これらの数値は大連市の経済的実力が、ここ数年の急速な発展を経て大きな段階へと飛躍できたことを示している。

本書では多くの政府事業について言及しているが、突出している主題は経済の構造調整と改革開放である。この6年半の間、大連の経済構造調整はさまざまな難関を乗り越えてきた。現在、石油化学、装備製造、造船、電子情報・ソフトウェアの「四大基地」と言われる基幹産業は全市の工業生産額の80%を占め、ハイテクノロジー生産額の比重は42%に達している。旅順南路に沿ったソフトウェア産業帯の発展は大連の新しい基幹産業が形成されていることを示している。紅沿河原子力発電所を含む全市の長期的発展に関わる多くのインフラ整備プロジェクトや産業プロジェクトも相次いでスタートした。諸改革が全面的に推進され、大連市の国有企業の株式制企業改革も完了している。民営経済の対前年成長率は二〇〇二年の45%から二〇〇八年の58%に増加

した。また対外開放が顕著な実績を上げた。大連は改革開放政策実施以来、中国における最大の外資誘致案件となるアメリカのインテルIC（集積回路）プロジェクトを誘致した。そして、全市の外資実際利用額は二〇〇二年の16億ドルから二〇〇八年の50億ドルに増加し、世界上位50社の多国籍企業の内80社余りが大連に進出して、100以上のプロジェクトを実施している。また大連に40余りの研究開発センター、物流センター、アフターサービスセンター及び5社の地域本部が設立された。長興島等の新しい臨港経済区域の開発は遼寧沿海経済帯の発展における重要なエンジンとなっている。夏季ダボス会議が大連で開催されたことも大連の対外開放の水準を一段と高めることに繋がった。

従来型工業基地振興戦略は大連の経済発展を一層推し進めると同時に、社会と生態環境の発展をも促進している。大連市は「人を以て基本とする（以人為本）」原則に立って、毎年、市民生活に関わる20件ほどの政策課題を移行し、就業、社会保障、教育、医療、住宅などの方面で大きな民生問題を解決した。二〇〇八年の登録失業率は2・7%に下がり、都市住民の平均可処分所得は二〇〇二年の8200元から二〇〇八年の1万7500元に増加した。また農村住民の平均純収入は二〇〇二年の4140元から二〇〇八年の9818元に増加し、二〇〇九年の都市と農村の所得格差は1対1・78である。大連市住民一人当たり平均寿命は80歳に達している。市民は落ち着いて生活し愉快地働いており、社会は調和が取れ、安定的である。生態環境は大いに改善され、森林面積率は二〇〇二年の38%から二〇〇八年の44%に拡大している。都市生活における汚水処理率は二〇〇二年の40%から二〇〇八年の90%以上となった。二〇〇八年の大連市

の空気の質は改革開放以来の最高レベルに達している。この間、大連は「全国文明都市」「国際花園都市」などの称号を授与されている。これらは、従来型工業基地振興戦略が策定されて以来、大連が科学的発展観に沿って発展していることを十分に説明している。

従来型工業基地振興戦略において政府は重要な役割を果たしている。中国の経済発展は「両手」で推進されている。一方は市場メカニズムという「見えざる手」であり、他方は政府という「見える手」である。しかし従来型工業基地振興の過程において、東北地域は長期にわたって計画経済に束縛されてきており、国有経済が主体となっていて、市場メカニズムという手には大きな制限があるために、政府の役割が極めて重要になってくる。この改革のプロセスにおいて、私政府と市場の関係をうまく処理する上で次の3点を重要視した。第一に、政府の力による市場メカニズムの育成を堅持する。東北振興の中核的課題はシステム改革である。そのため改革の第一の推進力は政府でなければならない。ここ数年、私はスタッフを指揮して国有企業改革、総合的なワンセット改革及び民営経済の発展に大きな精力を傾注してきたが、その目的はほかでもなく市場経済のメカニズムの育成にこそある。第二に、市場メカニズムの失敗を補う政府の役割を堅持する。とりわけ都市機能の整備、インフラ建設、戦略的産業の育成、生態環境の発展、社会保障システムの整備などの分野は市場メカニズムの調節に頼ることは不可能であり、政府が大きな役割を果たさなければならない。第三に、政府の権限を制限し政府の役割を転換させる。それは従来型工業基地の振興において、政府が市場メカニズムを育成する必要があると同時に、市場の欠陥を補う必要もあり、そのためにすぐ政府の権限が膨張して、計画経済システムに逆戻りする

る恐れがあるからである。従って、私は市長在任中、粘り強く行政管理システムの改革を押し進めてきた。この改革を経て、行政による許認可項目は二〇〇三年までの約1700項目から二〇〇八年の約100項目に圧縮された。そのため行政サービスの効率が一段と高まり、政府と企業との行政交渉の時間は二〇〇三年までの90日間余りから二〇〇八年の14・6日間に短縮した。市政府は企業と市民の行政手続きの便宜のために、「ワンストップサービス」という行政サービスセンターを設立した。またISO9000シリーズ（質量管理標準）を全面的に導入した。これによって法律に依拠した市政府の行政とサービス型政府建設の水準を高めた。本書のかなりを占める文章の内容は、この数年来、大連市政府が行政管理システム改革を推進するために弛みなく努力してきたことを物語っている。

原著に収録した43篇の著作は、年ごとに章を立て、年度を一つのまとまりとして配列している。各章の最初は政府活動報告である。政府の事業は数限りなく存在するが、毎年の政府活動報告の起草は市政府にとって重点的な事業である。政府活動報告は書くものではなく、つくるものなのであり、また掘り下げて大量の調査研究を行った上で総括し、まとめたものである。私は政府活動報告の作成過程を、前年度の事業に対する総括と新しい年度の事業計画に対する研究の過程として位置づけてきた。毎年十月に政府事業の作成グループを設立して準備に着手するが、私は自ら責任者を務める。まず、直面する課題についての調査研究を行い、先進地区へ学びに行き、また各区、県級市、県、開発区などの先導区域に深く入り込んで、さまざまなデータに基づいて分析し検証する。その上で共産党大連市委員会の全体的計画に基づいて新年度の経済社会発展の諸

目標と任務、具体的な措置について検討の上、決定する。然る後に政府活動報告の作成、論証、修正作業を行う。初稿を完成したあと、各方面からの意見を徴するのであるが、毎年の政府活動報告の作成において、私は自ら意見を求めるための会議を十数回主催し、とりわけ各界の人々、市人民代表大会の代表、市政协協商會議の委員、民主諸党派及び各界の代表の意見に耳を傾ける。最後に市政府常務会と共産党大連市委員会常務委員会の討論を経て、政府活動報告を決定する。この数年の政府活動報告は市政府のもつとも重要な文献であり、市長が年度内に政府活動を指導するガイドラインの性格を持つ公文書であり、また市人民代表大会の代表と市政协協商會議の委員が市政府の事業に対し監督し点検するための基本的根拠となる。収録した政府活動報告以外の文章は主としてこの間のさまざまな会議、調査研究におけるスピーチや講演である。また新聞に公表している政府の事業に対する指導的文書である。これらの文書は、市政府事業の報告を細分化し掘り下げているものもあり、またそれを具体化したものもある。言及した問題は多岐にわたり、国有企業改革、産業構造調整、国際運輸センター建設、対外開放、都市建設と管理、重点的な民生プロジェクト及び政府行政管理システム改革などを包括しているが、これらの問題はすべて基本的には従来型工業基地振興の中で解決が求められている鍵となる問題である。

私が二〇〇八年に大連市第十四期人民代表大会第一回會議において大連市長に再任された際にを行った、「時間と歴史の検証に耐えうる市長を目指して」というテーマの挨拶を、本書の最後に置くこととした。この挨拶は、二〇〇三年大連市第十三期人民代表大会第一回會議で大連市長に選ばれた際の挨拶と相呼応するものである。私がこれらの挨拶を通して述べたいことは、私が当

時市長に任じられるに当たって、人民代表に対して行った厳肅な誓約を実現したということである。同時に私は市長在任中、精力と思慮の限りを尽くし、辛苦を嘗め尽くしてきたが、これは非常に価値ある事であったと感じていることを申し上げたい。とりわけこの期間、私の名前が大連市という都市の名と深く結びつき、また私たちのこの偉大な都市のために自らのすべてを捧げることができたことに、私は非常に満足し誇りを感じている。

本書の上梓に際し賜った各方面からのご支持に感謝申し上げます。まず市長在任中、共産党遼寧省委員会、省政府の主要指導者である李克強、薄熙来、聞世震、張文岳、陳政高をはじめとする同志から温かい配慮と多大な支持を得た。多くの仕事はこれらの指導者の指導の下でなされたことである。次にこの間の大連市政府の事業は当時の共産党市委員会書記である孫春蘭、張成寅同志の多大な支持も得ている。さらに、私が2期に跨またかって市政府の市長を務める間、すべての市政構成員は団結して刻苦奮闘してきた。この間、私たちは共に多くの困難と曲折を乗り越え、ともに、実りある成果を収めた喜びを共有することもできた。皆さんに心より感謝の意を表したい。

最後に本書に対する読者の皆様のご批評、ご叱正を心よりお願い申し上げます。

夏 徳 仁

二〇〇九年十二月 大連南山に於いて

日本語版序言

日本の各界の友人たちの関心と尽力によって『大連振興の軌跡』（日本語版）は間もなく日本の読者に届けられることになる。本書が日本の各界の読者にとって中国と大連を理解するため参考となる一冊になることを願っている。

大連は、地理的には比較的日本に近い都市であり、中国東北部遼東半島の最南端に位置して日本との交通は至便である。東京、大阪をはじめ日本の10都市との間で航空路線を開設しており、週70便以上の直行便が就航している。大連にとって日本はもっとも重要な貿易と投資の相手であり、日本との貿易額は大連の対外貿易額の30〜40%を占める。現在大連に投資・登録している日系企業は合計3000社以上に上り、日本からの投資額は2兆円を超えている。日本から進出している主要産業は装備製造、電子情報及び現代的サービス業である。しかし近年、大連は日本のIT分野の企業との協力が急速に進展しており、大連のソフトウェア産業の輸出額の70%以上は日本市場に向けられている。経済貿易における協力関係が緊密化したことに伴い、大連と日本は教育、文化等の面での協力も急速に発展している。現在大連市は日本語を話せる人材が中国の大都市の中でもっとも多い。ここ数年、大連は対外開放と産業発展において顕著な成果を上げたが、これは日本との協力関係を強化したことと密接な関係があると考えられる。

現在、大連は新たな発展の時期に入っている。今年是中国の「第十二次五カ年」計画実施の初年度にあたる。大連市も市の「第十二次五カ年」計画に照らして、今後の5年間に、経済成長率を年平均14%前後で維持し、域内経済総生産は現在の5100億元から1兆元に倍増し、一人当たりGDPは2万ドルに達することを目指している。この期間、大連市は「遼寧沿海経済帯発展計画」に沿って、東北アジアにおける重要な国際運輸センター、国際物流センター及び地域的金融センターの「三つのセンター」、並びに「一つの集積区」と呼んでいる現代的産業区域の建設を推進する。また産業構造調整の最適化を進め、市の全域を都市化して、大連を経済が発達して環境が優美な、そして市民が裕福な現代的国際都市として建設することを目指している。

日本語版『大連振興の軌跡』は立命館大学によって監修・翻訳された。私は立命館大学とは良好な関係を維持している。二十世紀九〇年代に私が中国・東北財経大学の学長であった時代から、立命館大学との友好協力関係を推進してきた。両大学の間では教育、研究及び人的交流において、密接な協力関係が続いている。二〇〇三年に大連市長に就任して以来、私は何度も立命館大学を訪問し、大連市と立命館大学との間で人材養成、プロジェクト研究などの分野で協力を推進してきた。二〇〇八年九月に、私は光栄にも立命館大学名誉博士号を授与された。この間、長田豊臣理事長、川口清史総長及び立命館大学の諸先生方と深い友誼を培ってきた。この著書の翻訳作業は川口総長の関心と尽力の下で、長年の友人である慈道裕治教授が監修し、斎藤敏康教授、松野周治教授及び曹瑞林教授が主要訳者となるという共同の努力によって順調に翻訳・監修を進めていただいた。私は立命館の友人たちの尽力に感謝と敬意を表したい。

本書の出版に際して、日本の宮城県、岩手県、福島県など東日本地域でマグニチュード9・0という大地震と津波が発生したことを知り深く心を痛めている。この機会を借りて地震と津波で被災した方々にお悔やみを申し上げるとともに、被災地の方々にお見舞いを申し上げます。被災地の皆様が困難を乗り越え、美しい故郷を復興することを心より願っている。

最後に、本書日本語版の出版にあたり、日本電産株式会社代表取締役社長永守重信先生より寄せられた支援に謝意を表したい。

夏徳仁

二〇一一年三月十七日 大連に於いて